

、ヒトがいる、モノがある、暮らしがある、 - 場所の再調整、仲間との実装の経過報告。令和6年能登半島地震被災地、黒島地区から -

01-a. 非当事者として被災地に入り込み、

令和6年1月1日に発生した能登半島地震の被災地に関わっています。全くの非当事者ではありますが、建築を4年間学んだ1人の人間として、今被災地で自分が何ができるのか考えています。



01-b. 遠方の地で被災地への関わり方を考え、

日本建築学会主催建築文化週間学生WS2024の実行委員を務め、東京で、「自分はどうのように被災地に関わるのか」をより多くの人と考えようと、展示、ワークショップ、シンポジウムを開催しました。



01-c. 現地事業者から仕事を請け負い、

輪島市門前町黒島町にご縁があり、3ヶ月ほど住み込みで参与観察をしながら、被災した物件を改修させていただく機会をいただきました。どのように改修するか、その方法論から探り直しています。



01. Background / 非当事者として

02-a. 建物を活用可能にするMPを作り、

被災状況と機能変化に 대응できるように、全体計画の合意形成を図面で行いました。この計画の中では、ある程度現場判断で自由に意思決定を行えるように機能します。



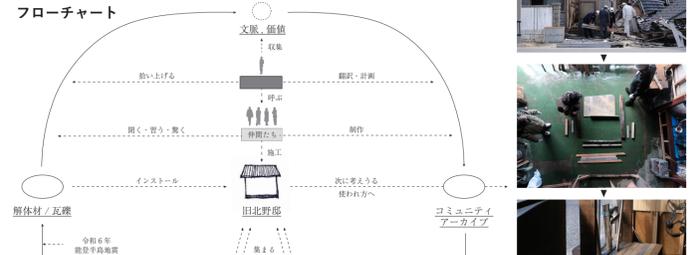
02-b. 皆で未来を考える気概を作り出し、

作り途中から地域の人に集ってもらい、皆で集まり、未来のことを考える場所にするという気概を醸成すべく、集まる機会も形成しました。



02-c. 設え / 什器単位の手仕事から解答し、

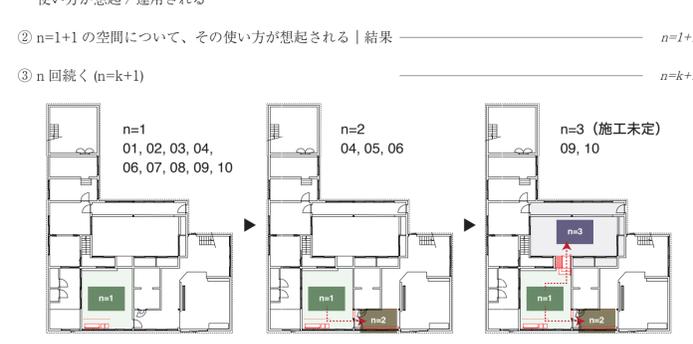
すぐには大きな予算を当てられないので、今手に入る材料で、黒島の文脈を引用して、仲間との手仕事のスケールから、空き家に新しい役割を与え、調和した環境を整備するプロセスをとりました。



02. Process / そこに建築家は可能か

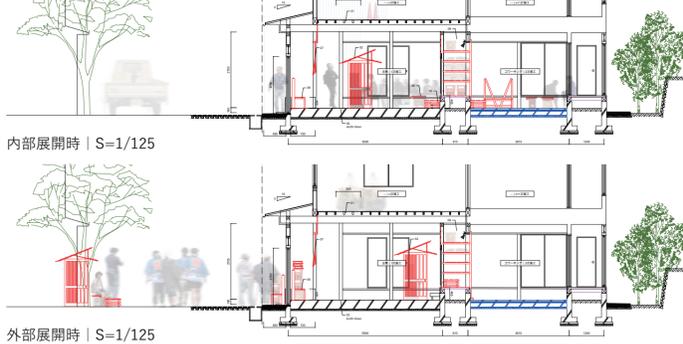
03-a. 「n次設計手法」で関わる人の思いを紡ぐ、

この建築のビルディングタイプは倉庫です。そして、管理するリソースを用意できません。なので、使い方の解像度を上げ、また建築と人の応答を繰り返し続けるため、下記の設計手法を取りました。



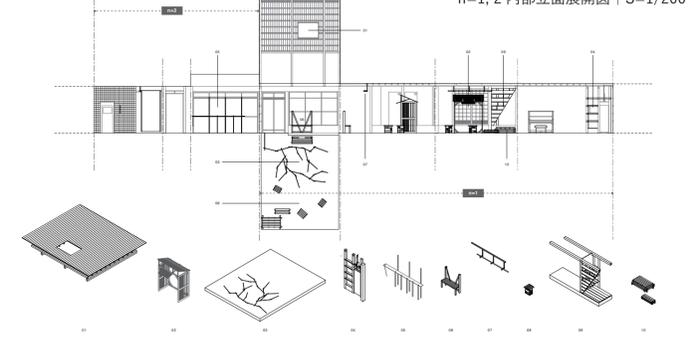
03-b. ありうる未来の出来事の舞台になる、

建築で起こる活動は、街と集落の人々、ひいては外部の者と集落の人々の接地面になることを想定しています。人の使い方 / 集まり方 / 用途によって、様々な空間の展開の仕方が想定されます。



03-c. 黒島の縮図が記述されていく、

各室には立面展開図を埋めていくように、次々とモノが置かれていきました。能登半島地震を機に、黒島の文脈を適宜拾い上げながらサルベージした材で作られる造作は、生きたアーカイブでもあります。



03. Architect / 建築家として、私は被災地における新しい建築の建て方を考えました。

位置付け：作り手の介入方法のプロトタイプ | 問い：私/私たちは被災地で何が出来るか？